

R18

竜座長と城塞の強気従者

全10話

体 験 版

1

第1話

後継者争いと、竜の座長

重々しい第一王子派と第二王子派による権力
闘争の影が立ち込める、真夏の交易都市ラウデ
ン・王城離宮。

照りつける太陽が石造りの廊下に熱気を溜め
込む中、城の従者として働くレッサーパンダ獣
人の青年ロキは、ふさふさとした縞模様の尻尾
を小さく跳ねさせながら、両手で抱えた豪華な
絨毯を広間の陰へ運んでいた。

(……くそっ、王子たちの継承権争いのせいで、俺たち平従者まで連日駆り出されて殺気立ってる……。早くこの混乱を抜け出さないと……)

ロキは額に浮き出た汗を拭い、首元へ回した

手のひらで服の隙間を静かに確かめた。衣服の裏地には、東岸診療所のモル先生から特別に処方してもらった苦い「消し香」の小袋が忍ばせてある。

ロキには、命に関わる重大な秘密があった。男の姿をして生まれながら男性器を持たず、股間に女性器と子宮だけを持って生まれた「胎持ち」の体質であるということだ。

普段なら城の激務と消し香の香りで体臭をごまかし、持ち前の気の強さと要領の良さで従者として立ち回れる。しかし、真夏の猛暑と満月が近づく重圧が重なり、身体の奥底から込み上

げる「月の熱」が、衣服の隙間からかすかな蜜の香りを漏らし始めていた。

（まずいな……熱が上がり始めてる。……早く裏抜け道の鍵を使って自分の部屋に引きこもらないと……）

ロキが胸元のポケットに入った真鍮製の「裏抜け道の鍵」を指先で確かめた、その時だった。

城の広間から響く高らかな拍手と歓声。本日、第一王子の歓心を買うために離宮へ招かれた、街道で高名な興行一座――その楽屋口の重い木造扉が開いた。

「――手前どもの準備は整いました。お下が

りください」

座員を去らせ、一人楽屋から姿を現したのは、
圧倒的な体躯と漆黒の角を持つドラゴン獣人――
一旅一座の座長、ヴォルクだった。

二メートルを超える巨大な身体、竜特有の硬
質な鱗が覗く胸元、写真のような眼光。数年ぶ
りに目にするその姿に、ロキは思わず息をのん
だ。

（……ヴォルク！？ なんてあいつが、こん
な政争の渦中にある城に……！？）

ヴォルクはロキにとって、旧市街で育った頃
の「腐れ縁」の旧知だった。言葉数が極端に少

なく、何を考えているか分からない無口な男。

視線が交差した瞬間、ヴォルクの琥珀色の瞳が静かに収縮した。

「……ロキか」

低く、地鳴りのように響く一声。ヴォルクは足音もなく歩み寄り、ロキの肩口へと鼻先をわずかに近づけた。

「……っ！ なんだよ、ヴォルク。急に近づくな……っ！」

ロキは強気な眼差しで睨みつけ、後退ろうとした。しかし、真夏の蒸し返す空気の中、二人の距離がゼロになった瞬間――ロキの体温と消

し香の油分が熱でかき消され、股間とお尻の付け根（におい袋）から、熟しきった果実のような濃密な発情臭が、ぶわッと楽屋前に広がった。

「……匂いでわかるぞ」

ヴォルクが低く呟いた。

「——ッ！？」

ロキの背筋に冷たい戦慄が走った。隠し続けていた「月の熱」の甘い匂いを、竜獣人の鋭敏な嗅覚に一瞬で見抜かれたのだ。

「……入れ」

ヴォルクはロキの襟首を掴むと、抵抗する隙も与えず楽屋の中へ連れ込み、重い木扉を閉め

て真鍮の鍵をガチャリと降ろした。

退路を断たれた密室の中。ロキは背中を壁に打ち付けながらも、持ち前の勝気な瞳でヴォルクを睨み返した。

「……見たな、ヴォルク。そうだよ、俺は『胎持ち』だ！ だが城の従者である俺を無闇に手込めにする気なら、タダじゃ済まさないぞ！」

「……誰が手込めにする言った」

ヴォルクは一切の感情を見せず、淡々とロキへ迫る。乱暴に服を引きちぎるような真似はせず、軍用手縄を取り出すと、ロキの手首を速やかに捉えた。

「な、何するんだ……っ！ 放せ！」

「危険だ。熱で暴れるお前を抑える」

ヴォルクはロキの両手を上掲させ、レッサーパンダが威嚇する際にとる「両手を上にピンと挙げるバンザイのポーズ」のまま、柱の金具へ手縄でしっかりと縛り付けた。両手が頭上で固定されたことで、ロキの胸とお腹、さらに下半身が無防備に晒される。

「くそっ……！ 離せ！ 取引きだ、ヴォルク！」

ロキは縛られたまま、強気に噛みついた。

「俺は王子たちの後継者争いに巻き込まれかけてる！ 俺の手元には城の『裏抜け道の通行

鍵』がある！ これをお前にやる……！ だから、俺の発情を誰にも言わないで、今すぐ解け！」

「……交渉か」

ヴォルクは短く応じると、ロキのズボンの帯を静かに解いた。

「あ……ッ！？」

布地が押し下げられ、暖かな楽屋の熱気に晒されたロキの股間。

そこには男の象徴など欠片もなく、発情の熱で愛液をにじませ、赤く充血してひくひくと震える処女穴が露わになっていた。さらに、お尻の付け根にある小さな「におい袋」からも、照

れと発情の甘い汁が溢れて内股を濡らしている。

「……条件を飲めば、身体を差し出すと言いたいのか」

ヴォルクは懷から、黒く硬い「竜の角型小栓」を取り出した。

「な、なんだよそれ……っ！ ヴォルク、何をする気だ……ッ！？」

「……お前の蜜は、匂いが強すぎる。城内に撒き散らされては困る」

ヴォルクは口キの太ももを太い手で押し開くと、愛液でぐしょぐしょに濡れた処女穴の口へ、竜の角栓の先端をあてがった。

ズチュ……ッ♡

「んぐっ……ッ！？♡」

「あゝっ、あああッ♡ な、なにを入れるんだっ……！

お腹のなかに、固くて冷たいのが入ってくるうッ

♡」

指のかわりにねじ込まれる、硬く太い角栓。

みちみちと狭い処女穴を押し広げ、ヴォルクは

容赦なく最奥まで角栓をズドンッ♡と押し込ん

だ。

「……栓をした。……愛液は全部ためておけ、

あとで検分する」

ヴォルクは無口なまま、角栓の根元を固く押

し留めた。

「ひああッ……！♡ お、お腹のなかに栓っ……！

抜けない……蜜が出せないよお……ッ♡」

「……鍵の取引は保留だ。……今夜はここで
大人しくしている」

ヴォルクはロキの通行鍵をポケットへ収めると、角栓を咥え込まされたまま手縄で吊るされたロキを残し、楽屋の奥へと向かった。

（第2話へ続く）

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

竜座長と城塞の強気従者